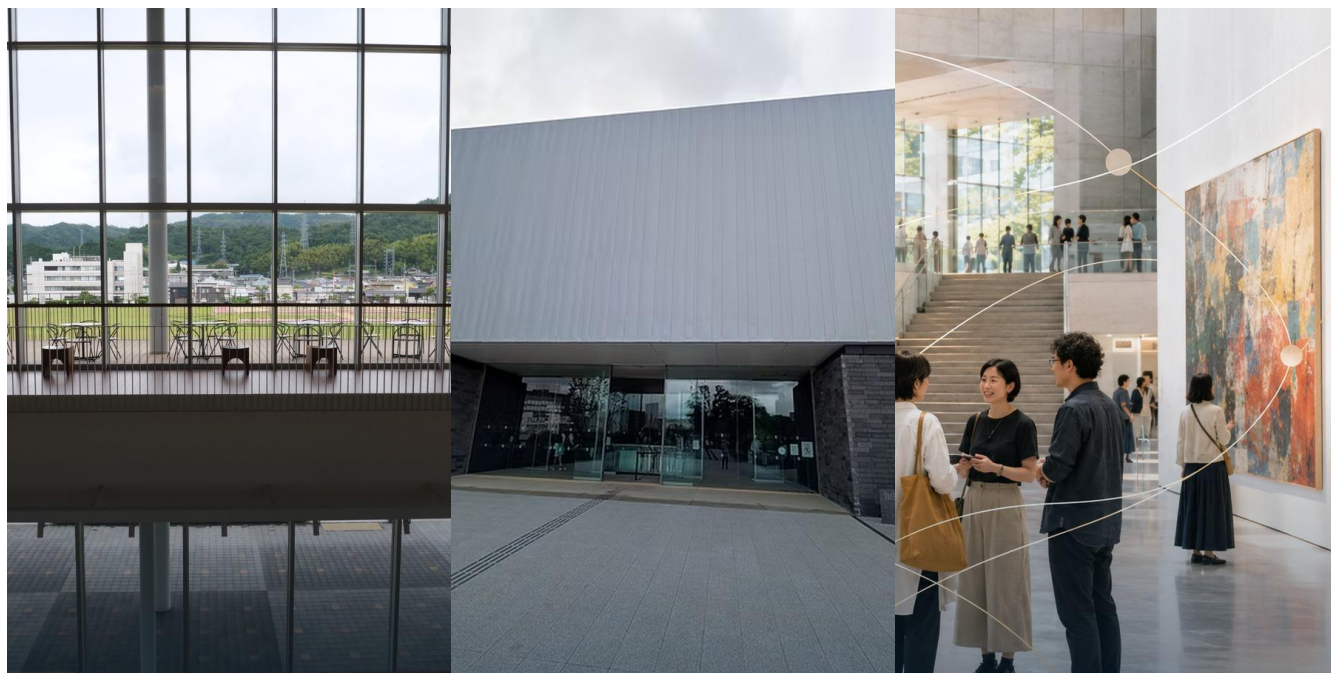


地域と社会をひらく ミュージアム

鳥取県立美術館・川口市立美術館・東京都美術館から考える、
これからの公共文化施設



左：鳥取県立美術館周辺を望む館内空間 中央：川口市立美術館 右：公共性をテーマにしたイメージビジュアル / 写真・ビジュアル：ArtTech Consulting

2026.09 / Vol.01

IT Business × Art × Strategy

はじめに

美術館を「建物」ではなく、地域と人をつなぐ仕組みとして見る

ArtTech Consultingでは、「現場レポート」「ArtTechトレンド」「ミュージアム研究」を通じて、IT・アート・文化・事業開発の交点にあるテーマを継続的に調査・発信しています。

本レポートは、その中から公共美術館の役割と地域文化戦略に関する3つのケースを選び、ブログ記事をベースに再編集したものです。単なる施設紹介ではなく、運営モデル、都市政策、地域産業、市民参加、公共性という視点から「これからの美術館がどのような価値を生み出せるか」を整理しています。

本レポートで見る3つの視点

- ① 鳥取県立美術館：新設館を地域文化・観光・学びのプラットフォームとして設計する視点
- ② 川口市立美術館：都市の文化戦略として美術館を位置づけ、地域産業や公園と接続する視点
- ③ 東京都美術館：「公共」を制度や建物だけでなく、人と人・組織と組織の関係から捉える視点

美術館は「展示する場所」から「関係をつくる場所」へ

作品を収集・保存・展示することは、美術館の根幹です。一方、現在の公共文化施設には、学び、交流、地域への愛着、創造的人材の育成、観光、地域産業との連携など、複数の役割が重なり始めています。重要なのは機能を増やすことではなく、それぞれを地域の文脈に沿って組み合わせ、継続的な関係を生み出すことです。

読者として想定している方

- 自治体・文化施設で、文化政策や施設運営を検討する方
- 企業で、地域連携・新規事業・CSR/文化事業を担当する方
- ミュージアムDX、ArtTech、文化とテクノロジーの接点を考える方
- 地域文化・まちづくり・アートの事業化に関心のある方

※ 本レポートは現地視察、講演参加時の記録、公開情報およびArtTech Consultingブログをもとに再編集しています。施設・制度等の情報は執筆時点の内容です。

3つのケースから読む、公共美術館の現在地

CASE 01	鳥取県立美術館	新しい公立美術館の運営モデルと地域文化戦略
CASE 02	川口市立美術館	文化戦略で美術館を新設
CASE 03	東京都美術館	「美術館という公共」について考える

Executive Summary

01 新設館の価値は、建築だけでは決まらない

鳥取県立美術館では、PFI、無料の滞在空間、学習プログラム、周辺文化施設との近接性が重なり、地域の文化拠点としての価値が設計されています。

02 美術館は都市ブランドを蓄積する装置になり得る

川口市立美術館は、駅・公園・ホール・地域産業を結びつけ、短期イベントではつくりにくい「都市の文化イメージ」を長期的に育てる役割を担います。

03 公共性は「関係の設計」によって生まれる

東京都美術館の事例からは、行政が一方的に公共サービスを提供するだけでなく、市民・大学・福祉・医療などとの関係の中で公共性が育つことが見えてきます。

04 評価軸は来館者数だけでは足りない

市民活動、地域への愛着、異分野の連携、学び、交流人口、産業との協働など、時間をかけて蓄積する価値をどう把握するかが重要です。

鳥取県立美術館

新しい公立美術館の運営モデルと地域文化戦略



大きなガラス面を通して倉吉の街とつながる館内空間 / 写真: ArtTech Consulting

KEY INSIGHT

美術館単体で集客するのではなく、「学び・滞在・交流・周辺文化施設・まち歩き」を組み合わせ、文化拠点として地域全体の体験価値を高めるモデル。

2025年、倉吉に誕生した県立美術館

鳥取県立美術館は2025年3月、倉吉市に開館しました。県立博物館から美術分野の機能を独立させた、鳥取県として初めての県立美術館です。開館前にはアンディ・ウォーホル《ブリロ・ボックス》の購入が大きな議論を呼びましたが、結果として新しい美術館の存在を県内外へ広く知らせる契機にもなりました。

SOURCE ArtTech Consulting「鳥取県立美術館から学ぶ、新しい公立美術館の運営モデルと地域文化戦略」[元記事を読む](#)

「未来をつくる美術館」を、運営と空間で具体化する

1. PFIによる公民連携

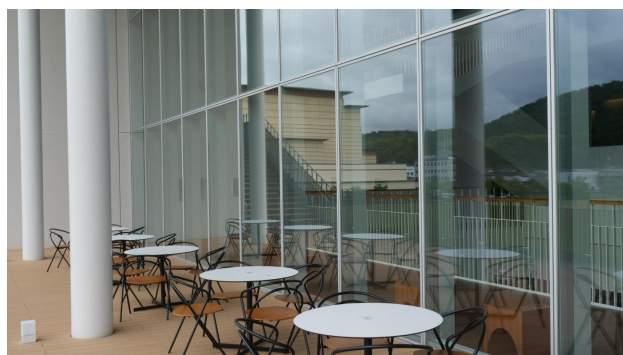
設計・建設・維持管理・運営に民間のノウハウを取り入れるPFI方式を採用。学芸・収集・研究など美術館の専門性を守りながら、施設運営やサービス面では民間の知見を活用する役割分担が特徴です。公共施設に求められる継続性と、利用者目線の運営を両立させる試みと捉えられます。

2. 「見る」以外の行動を受け止める空間

館内には市民ギャラリー、ワークショップ、子どもの創作体験、カフェ、テラスなどが配置され、展覧会を見ない人でも立ち寄れる余地があります。無料で利用できる場所が多いことは、美術館への心理的な入口を広げ、日常の中で文化施設と接点を持つ機会を増やします。



屋外のパブリックアート



滞在を促すテラス

3. 学びを「附属機能」にしない

Art Learning Labなどの取り組みでは、学校、大学、地域施設、企業等との接続を視野に、子どもから大人までを対象とした学習・創造活動を展開します。教育普及をイベントの付加機能にせず、美術館の中核価値として位置づけている点が重要です。

美術館の外側まで含めて、文化体験を設計する



大学・学生との連携を感じさせる「学生クリエイティブ・アクション」の展示 / 写真: ArtTech Consulting

周辺文化施設と「歩いて回れる」関係

美術館周辺には、倉吉交流プラザ、図書館、鳥取二十世紀梨記念館、広場などが集積しています。さらに倉吉の白壁土蔵群など、歴史的な市街地とも接続できます。単館の入場者数を最大化する発想よりも、地域での滞在時間や回遊を増やす視点が重要になります。

ArtTech Consultingの視点

「文化施設のドミナント」ではなく「文化体験のネットワーク」へ

施設を増やすだけでは地域価値は高まりません。デジタルマップ、回遊ルート、共通イベント、地域事業者との連携、来訪データの可視化などを通じて、施設間の関係を利用者体験としてつなぐことが次のテーマです。ITは展示を派手にするためではなく、「地域との接点を増やし、関係を継続する」ために活用できます。

SOURCE 元記事 [元記事を読む](#)

川口市立美術館

文化戦略で美術館を新設



2026年9月に開館した川口市立美術館 / 写真: ArtTech Consulting

KEY INSIGHT

駅・公園・文化ホール・地域産業という既存資産の間に美術館を置くことで、川口の都市イメージを「ものづくり×文化」へ更新していく文化戦略。

「なぜ今、美術館なのか」から考える

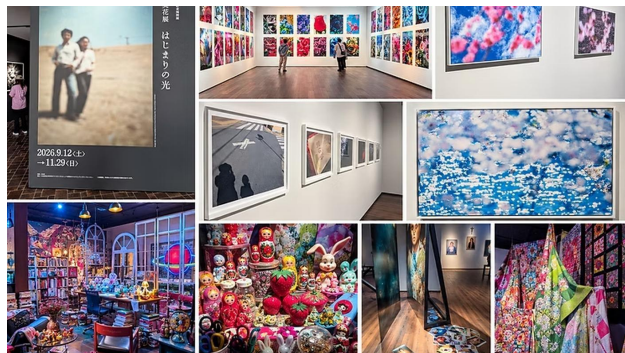
川口市立美術館は2026年9月、JR川口駅西口の川口西公園に隣接する場所に開館しました。開館記念特別展には蜷川実花を迎え、地域との縁を起点に新しい美術館の存在を発信しています。注目したいのは施設そのものよりも、川口市が美術館を都市政策の中でどう位置づけているかです。

SOURCE ArtTech Consulting「文化戦略で美術館を新設—川口市立美術館」[元記事を読む](#)

既存の文化資産に「収集・研究・継承」の軸を加える

1. リリア、アトリア、美術館の役割分担

川口には、音楽・舞台を担う川口総合文化センター・リリア、市民の創作活動を支えるアートギャラリー・アトリアが既にあります。一方で、作品の収集・保存・調査研究、大規模な展覧会、地域の美術資産の継承を一体的に担う美術館機能は限定的でした。新設館は、その空白を埋める文化インフラとして位置づけられます。



開館記念特別展の様子



アートギャラリー・アトリア

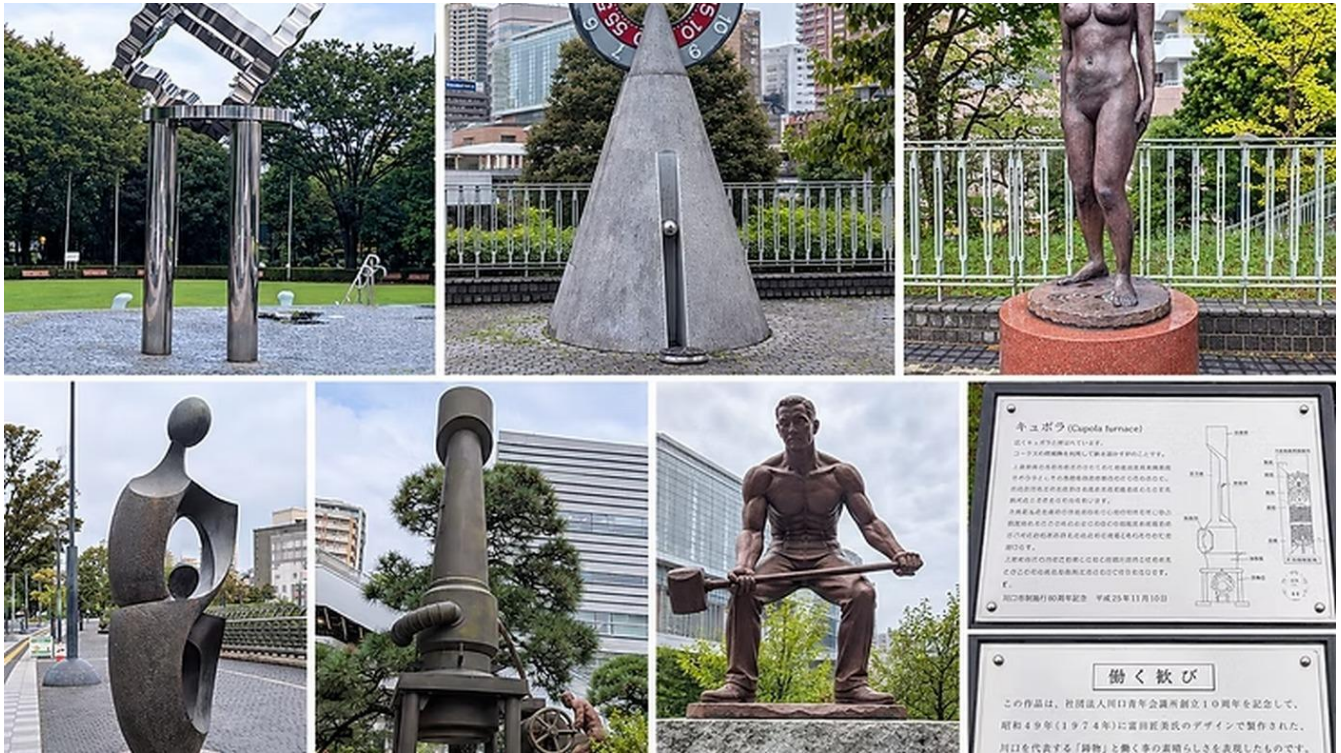
2. 「公園のような美術館」という考え方

理念として掲げられる「継承・共生・育成」と、公園に開かれた立地は相性が良いものです。美術館を作品鑑賞の目的地に限定せず、散歩、休憩、学び、市民活動の延長として使える場所にすることで、文化施設の利用者層を広げられます。

3. 文化施設は長期で都市イメージを蓄積する

イベントは瞬間的な集客に強い一方、美術館は収蔵・研究・教育・展覧会を積み重ねることで、都市に「記憶」を残します。1990年のリリア、2006年のアトリア、2026年の美術館という流れは、文化インフラを段階的に整備してきた時間軸として見ることができます。

「ものづくりの街」を、文化とデザインで再編集する



川口駅周辺・公園に点在するパブリックアート / 写真: ArtTech Consulting

地域産業 × アートという接続点

川口は鋳物をはじめとするものづくりの歴史を持つ街です。この産業資産は、美術館と組み合わせることで新たな文化資産になり得ます。たとえば、鋳物事業者と彫刻家、製造企業とデザイナー、市民とアーティスト、公園と現代アートといった協働は、地域固有の物語をつくります。

ArtTech Consultingの視点

「来館者数」だけでは測れない都市文化のROI

美術館の効果を短期の入場者数だけで判断すると、文化施設の本来の価値を過小評価しやすくなります。地域への愛着、市民活動の増加、企業・学校との連携、交流人口、地域産業の発信、街のイメージ変化などを中長期KPIとして設計することが重要です。デジタル会員、アンケート、回遊データ、イベント参加履歴などを組み合わせれば、文化政策の成果をより立体的に可視化できます。

SOURCE 元記事 [元記事を読む](#)

東京都美術館

「美術館という公共」について考える



東京都美術館100周年記念講演会から考えたこと

「美術館という公共」を考えるためのイメージビジュアル / ビジュアル: ArtTech Consulting / AI生成

KEY INSIGHT

公共性は「誰でも入れること」だけではない。異なる人・組織が出会い、自分たちで活動を生み出せる関係と余白を、美術館がどう設計するかが問われる。

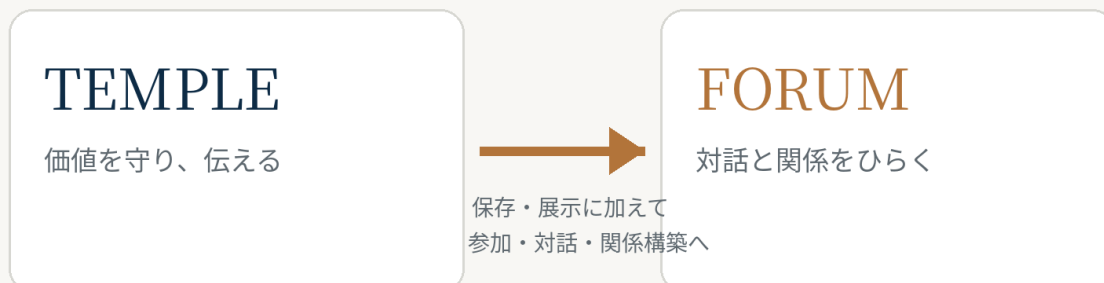
100周年記念講演会から見た問い

東京都美術館100周年記念講演会「美術館という公共について」への参加を通じて考えたのは、「公共」とは完成した制度やサービスではなく、人と人、人と組織、組織と組織の関係の中で立ち上がるものではないか、という点です。1926年、実業家・佐藤慶太郎の寄付を契機に誕生した東京都美術館自体も、私人の行動が公共文化施設へつながった歴史を持っています。

SOURCE ArtTech Consulting「『美術館という公共』について考える」[元記事を読む](#)

「価値を守る場所」から「対話をひらく場所」へ

美術館の公共性を捉え直す



美術館の役割を「Temple」と「Forum」の両面から捉える概念図 / 図: ArtTech Consulting

Temple と Forum は対立ではなく、両立する

美術館には、作品を保存し、研究し、歴史的・芸術的価値を社会へ伝える「Temple」の役割があります。同時に、未知の価値観と出会い、異なる人々が対話し、自分の見方を更新する「Forum」の役割もあります。重要なのは前者を捨てて後者へ移ることではなく、専門性を基盤にしながら参加の回路を増やすことです。

とびらプロジェクトが示す「参加の設計」

東京都美術館と東京藝術大学が連携する「とびらプロジェクト」では、多様な年代の「とびラー」が一定期間活動し、対話型鑑賞やコミュニケーションを学びながら、自発的な活動を生み出します。特徴は、参加者を単なるボランティア労働力として扱うのではなく、学び、試し、他者と協働する主体として位置づけていることです。

設計すべきなのは「プログラム」だけではない

ルールを細かく決めすぎると、自発性や偶発的な出会いが失われます。公共性を育てるには、制度と自由の中間に「小さく始められる余白」をつくる必要があります。

公共は、組織と組織の「あいだ」に生まれる

「公共」は施設の内側だけでなく、関係の“あいだ”に生まれる



美術館を中心とした関係のネットワーク / 図: ArtTech Consulting

美術館の外へ出ること、公共性は広がる

大学、福祉・医療、市民、企業、行政、地域文化施設など、異なる組織がそれぞれの専門性を持ちながら接続すると、美術館だけでは生み出せない活動が生まれます。ここでの美術館は、すべてを主催する「中心」ではなく、関係を媒介するハブに近い存在です。

ArtTech Consultingの視点

デジタルは「公共性を置き換える」のではなく「接点を増幅する」

オンラインコミュニティ、デジタル会員、アーカイブ、予約・参加管理、活動記録、AIによる情報案内などは、リアルな関係を代替するものではありません。来館前・来館中・来館後をつなぎ、これまで美術館との接点が少なかった人にも参加の入口を増やすために使うことで、公共性の範囲を広げられます。

SOURCE 元記事 [元記事を読む](#)

3館から見える、これからの公共美術館の5つの論点

01 施設からプラットフォームへ

展示・保存に加え、学び、交流、地域連携、創造活動を受け止める「関係の基盤」として設計する。

02 単館集客から地域エコシステムへ

周辺施設、商店、観光、学校、企業とつながり、地域全体での滞在・回遊・再訪を生み出す。

03 行政運営から共創型ガバナンスへ

PFI、市民参加、大学・企業との連携など、役割を分けながら多様な主体が関われる仕組みをつくる。

04 短期KPIから文化資本の蓄積へ

来館者数に加え、愛着、学び、市民活動、地域産業との協働、交流人口などを中長期で評価する。

05 IT導入から関係DXへ

デジタル展示だけでなく、参加・回遊・継続接点・データ活用を支えるインフラとしてITを使う。

3館の比較

視点	鳥取県立美術館	川口市立美術館	東京都美術館
主要テーマ	新設館の運営・地域連携	都市文化戦略・産業接続	公共性・市民参加
特徴	PFI／滞在空間／学び／回遊	駅・公園・ホール・ものづくり	とびらプロジェクト／関係の設計
示唆	文化体験を地域全体で設計	文化を都市ブランドへ蓄積	公共を「関係」として育てる

次に考えるべき問い

- 美術館が「地域の誰と、どのような関係をつくるのか」を言語化できているか
- 文化施設の成果を、来館者数以外の指標でも測定できているか
- IT・AIを、展示演出ではなく参加・継続接点・運営改善に活用できているか



IT・事業開発・アートの視点を組み合わせ、 曖昧な課題を実行可能な企画へ。

ArtTech Consultingは、ITビジネス、プロジェクト推進、事業企画の実務経験と、アート・文化施設に関するリサーチを組み合わせ、企業や文化領域の新しい取り組みを「構想から実行」へつなげるコンサルティング活動を行っています。

IT CONSULTING

- ・IT営業戦略・提案資料
- ・新規事業／ITサービス企画
- ・PM・PMO・要件整理
- ・プロジェクト改善・実行支援

ARTTECH CONSULTING

- ・アート・文化事業の企画
- ・文化施設のIT／AI活用
- ・顧客体験・コミュニティ設計
- ・IT × アートの新規サービス

Museum / Cultural Field

美術館・文化施設については、現地調査、政策・運行事例のリサーチ、デジタル活用、地域連携、コミュニティ形成、新規サービス企画などをテーマに継続的な研究と情報発信を行っています。

ご相談テーマの例

文化施設のDX構想 / AI活用アイデア / 地域連携・回遊施策 / 新規文化事業のコンセプト設計 / 企業とアートの協働企画 / 提案書・事業計画の整理

CONTACT

お問い合わせ・詳細は**Web**サイトから

www.arttech-consulting.com

ブログでは「現場レポート」「ArtTechトレンド」「ミュージアム研究」を継続更新しています。

